

からたちの花

長谷健著

小説文庫

からたちの花

長谷健

新潮社版

——小説文庫——

★からたちの花★

定價 一八〇圓

一九五五年六月二十六日 印刷
一九五五年六月三十日 發行

著者 長谷健

發行者 佐藤義夫

印刷者 山田三郎太

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局代表七一(八)
振替東京八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

目次

怖れ知るところ……………	五
大人の世界を覗く……………	二
命の洗濯日……………	三八
春のめざめ……………	五四
水天宮祭……………	七一
螢合戦……………	八七
野蠻人ども……………	一〇四
ぜに龜の如く……………	一二〇
霖雨降り續く……………	一三六
菱の實……………	一五三

颱風一過	一六九
外目の里	一八六
青春讃歌	二〇三
古問屋の師走業	二一〇
油屋炎上	二二六
薄月夜	二五二
暗い跫音	二六九
孤愁	二八六
たんぽぽ	三〇三
若鷺の巢立	三一九

装幀 野島 青 妓

から
た
ち
の
花

怖れ知るころ

『よか氣候になったねえ。ばって木の芽どきは女御心が、ぼうっと浮わつくけ、うかうかしとれんど。はっはっは……』

『そろそろ巡禮も出かけるころになりましたな』

『そういえば、眞教寺のゴンシャン（お嬢さん）も、御詠歌が上手というやないか』

かくべつな返事を求めるふうもなく、酒造家油屋の當主長太郎は、そういつてえんびを延ばし、銅壺の燭徳利を、自分でつまんでいた。珍しく機嫌のよいしるしなので、妻のシゲも氣が樂になつて、小鍋から鶏肉と豆腐のごった煮を、お手鹽につぎたしてやった。

『ジョン（坊やの意）達はどこへ行ったのやろ』

『日曜ですけ、ドンコ釣りにでも行つとりますやろ』

『へたなドンコ釣りじゃけ、はっはっは……』

『お父さんに食べさせるちいうて、はりきつとりましたが、釣れましたか、どうか』

『ほう、そげな殊勝なこと、いうとったか。ばって、隆吉より鐵雄の方が、釣りは上手やろ』

『そろもう、隆吉は氣が短うありますけ、鐵雄には、かないまっせんやろ』

『氣の短いの、親譲りじゃけな、はっはっは……』

『もう一本つけましようか』

シゲは、お世辭のつもりでいった。こんなに機嫌のよい長太郎も、近來珍しかったせいもあった。長太郎は手酌でのみつづける。

『新酒の火入れもすんだし、酒屋男も歸つてしもうたし、こゝろで少しのんびりせんことには……。喜一はおらんか。お相伴でもさせようか。あれも疲れとろうけ』

『へえ。呼びましようか』

シゲは立上がつて、次の間にはいつていった。喜一

は、日當りのよい縁側で、漁網のつくろいをしていた。

シゲは、習慣的な憚り聲で

『喜たん、一寸一寸、旦那が酒の相伴せんかち、いいよんなさるが』

『へえ、おありがとうございます』

酒屋男の總締めである喜一は、酒好きだが、ふだんは職掌柄酒をつつしんでいた。だから仕事のおわったあと、爛徳利一本の酒を、ちびりちびり一人でたしなむ程度だった。祖父から父へ、父から喜一へと、三代續いて北原家の一番番頭として、重用されて來たが、三代を通じた自慢のたねは、酒の上でのしくじりのないことであつた。

『喜一、一ぱいいかんか』

少し甲高い呼び方であつた。うかつに應答を遅らせると、この平穩な空氣が亂れることを、喜一はわきまえていた。そこで

『へえい』と、上ずつた答えをしながら、網すきのあぐりと魚型を、無造作に絲箱に入れて立上がつた。

シゲと喜一が、かつこの位置につくと、長太郎は、

珍しく眼を細め、

『ご苦勞、ご苦勞。お前も疲れたろうけ、二、三日泊りがけで、船小屋の温泉にでもいって來んか』といいながら、自ら酌をしてやつた。

『へえ。でも、そうもしておられまっせん。ジョン達のお供で、潮干にもいかにやなりまっせんけ』

『ジョン達のお供か。喜一も忙しかのう。ばつて、おかげで、ジョン達も太うなりよる。さ、もう一ぱいいけ……』

こうして太平な晝酒はつづく。そこに玄關の格子戸の開く音がした。

『なんとか、してくれんの』

抑揚の定かならぬ、調子はずれの女の聲で、どこかに氣狂いじみたひびきがあつた。忠勤な喜一は

『また、おみか婆が來たごとのある』といいながら、こつんとさかずきをおいて、立上がつた。

『なんとが、してくれんの』

それがおみか婆の口癖であつた。何かを一途に思いつめると、忽ち常人の域からはみだして、夢遊病者の

ように、そこそこ彷徨してまわる。それでいて、精神状態が落付いてくると、あわただしげに、家に歸って、久留米耕の機を織るのだから、佯狂のようにさえ見えることがある。

『おみか婆、あっちへいかんか』といって、喜一は格子戸の心張棒を、右手に握って構えた。

『木の芽どきは、どうもいかなあ』

そのつぶやきに、答えるかのように、

『長たんに會わせて……なんとか、してくれんの』

『なんともなるもんか。旦那の機嫌が、わるうなるばかりやないか』

『そんなら、トンカ・ジョン（大きい坊やの意、北原隆吉の通稱）は、俺の子じゃけ』

『ばかなこといわんで、早う歸らんかい』

『長たんは、俺の男じゃけ、トンカ・ジョンは、俺の子やろ、そうやろ』

油っ氣の消えた、赤茶氣た髪の毛を、片手でそっとかきあげる手さばきは、大して常人のそれと變らない。化粧のあとこそなく、顔色もいく分くすんでいるが、

目鼻だけはちゃんと整っていて、六騎（漁師のこと）の女房達より、ましな容貌である。ただものを思いつめた視線は、宙に浮いた感じで薄氣味悪い。だから、まだ婆という年ごろでもないのに、多分に輕蔑の意をふくめて、通稱おみか婆といわれているのである。

『おみか婆、歸らんとぶつぞ』

喜一は、子供でもあしらうように、心張棒をふり上げたが、打ちかかる氣配はなかった。

『長たんに會わせて……。俺は長たんに惚れとるけ、長たんと寝たこともあるけ』

『なにをいうとるか。ほんとにぶつぞ』

喜一が氣を取直し、本氣で身構えたところに、苦勞性のシゲが、茶の間から下りて來た。

『喜たん。やめなさらんか。そら、おみかさん。これが欲しいのやろ』

『そういいながら、ちり紙をまるめたものを、渡そうとした。』

『おみかさん、そら、これで白粉でも買いなさい』
おみか婆のおしゃれを、シゲも知っていた。一般に

は色情狂といわれているのも、ゆえないこともなかった。時には、身に不釣合な装身具をつけ、男の前で奇妙なしなを作ってみせるおみか婆が、何を好んでいるかも、シゲは知っていた。ところがおみか婆は、一たん受取ったちり紙を、いきなり土間にたたきつけ、『おシゲのおシゲの男盗人！』というやいなや、地だんだをふんで、泣きはじめた。

『おみか婆、よか加減にせんか』

喜一は、心張棒で、おみか婆のひたいを、とんとついた。そこに長太郎が出張って来て『お前たちなにしているかっ！』と、土間中にこだまするような聲で、どなりつけた。とたんに、おみか婆は、

『あら、長たん、来てくれたの』

今まで泣いていたのをけろりと忘れて、いかにも恥しそうな、しなを作って、くっくつと笑いだした。長太郎は、唇をかねで、つかつかとおみか婆に迫り、『おみか婆、外に出ろ』と、しかりつけた。そして『喜一、なんだ。お前、おみか婆一人よう噓置出来んで、酒屋の番頭がつとまるか、ばかたれがっ』

平和な雰囲気は、忽ち亂れた。長太郎は、手にしたさかずきを、しぶしぶ出ていくおみか婆めがけて、はつしと投げた。後頭部にあたったさかずきは、宙を舞って、おみか婆の足許にぼんと落ちた。

喜一は、ご機嫌をわるくした長太郎には、好きなどンコ料理でも、食べさせなければ、おさまるまいと思つた。

一たん不興を買ったがさいご、誰のいうことにも耳を傾けず、手あたり次第あたり散らし、やけにたばこを吸って、火鉢のふちを、かたかたきせるで、たたきつける長太郎である。それでもなお氣が収まらないで、廣い部屋の中を、動物園の熊のように歩きまわり、怒氣を發散せようとする。

シゲは、そんな時さえ、逃避することを、許されないうで、ただ何事も自分の至らなさをのせいかのような顔をして、恭順の意を表するのだった。長太郎はそこで、再び座につくと、

『シゲ、お前はおみか婆のいうことを、本氣にしとるのやろ』

『いいえ、まさかあげな氣狂のいうこと、本氣にするもんですか』

『そんならよかが、あれは色氣狂じゃけの』

『人間のうちには、數えておりません』

ところが、何が急にかんに觸れたのか、長太郎は、とつぜん荒々しく、

『ばかたれ！ 俺をおちやらかす氣か！』と、怒鳴りだした。それは、自ら省みて、自分の始末がつかず、良心に抵抗しているようないい方であった。しかし、シゲにはその叱責の意味が、よくのみこめない。けれども、ここでうっかり口に出せば、必ず長太郎を刺激するだけだと、承知しているので、黙って耐えるのだった。それは永年に亘って培って來た、貞節な女としての、シゲの習性のようなものであった。

土地の風習として、分限者が家の外に女をもつことは、働きのある男の證據とさえ、考えられている。そのことはシゲも、とうに承知していた。長太郎が、夕食後微醺にまかせてあげる、お經の中で、たわむれに女の名前を、讀みこんでいるのを、聞いたことがある。

宴席などで、餘興として、同じことをやった話も、誰からともなく聞いていた。

しかし、女のつつしみとして、嫉妬めかしい口を出すような、シゲではなかった。そのことを、よくわきまえていて、シゲが白ばくれているようなのが、長太郎には、かえって頼であったらしい。ここでシゲも、よほど、

『おちやらかすなんか……』と、一言さしはさみたいところだったが、も早皮膚のように、しみついた習癖は、どうにもならなかった。

『喜一、お前はどう思うとるか』

『何とも思いうも、ございませんが、旦那のいわれることに、間違ひなんか、ありますもんか』

そう答えるより外なかった。長太郎は、もっと自分の胸底深くはいりこんだ理解が、欲しかったが、それが得られないいらだたしさから、又も荒々しく、

『酒の肴はどうした。この鶏肉は庖丁でも持って來んと、硬うして食われんぞ』と、大げさに叱りつけた。

とっさに喜一は、

『旦那さん。ドンコはどうですな』

『え？ ドンコがあるなら、なぜ早う出さんか』

言葉の調子は鋭かったが、妥協の氣配は、たしかであつた。喜一はすかさず、

『一寸待って下はりませ』といひすてると、とつと土間に駆け下りた。酒買ひに來ていた下駄屋の娘が、そのあたりをくつて、危く手にした酒德利を、取落すところであつた。

『ジョン達は、きつと竹御門の石橋のところ間違わん』ひとりごとをいいながら、一さんに駆けだした。

鐵雄が、おぼつかない手付で、鐵の輪をまわして來る。隆吉は少し遅れ、釣ざおを肩にして、びくを下げている。清介は、釣針につるしたドンコを、ぶら下げながら、小走りに隆吉の後からつづいていく。

竹御門橋を渡ると、鐵雄の鐵の輪が、少しばかりとちつて、橋の正面の家の壁にぶつつかつた。鐵雄は、

鐵の輪を左の手に拾いあげ、後から來る清介に、
『ドンコは、そうつるされちゃ、可哀想（かわいそう）かろうが……針をとつてやらんかい』といった。清介のドンコは、

三年ものなので、十五センチにも近く、グロテスクな嗜好をしていた。すでに逃亡を斷念したらしく、じたばたしないので、あきらめきつた眼を、宙に放っている。『針を呑みこんでいるけな。それに、こうしていた方が、人に見せびらかすに都合がよか』

清介は、厚い唇から、大きな門齒をのぞかせ、にやにや笑つて、そのドンコを目の高さにあげた。つばめが「お花」の倉のなまこ壁のあたりを切つて、子供たちの頭上を、かすめて飛んだ。

『そのドンコ、どうするか』と、隆吉が聞いた。

『ジョン家のお父さんに、くわせてやろう』

『え、ほんとか』

『いつも、ジョン家で、遊ばせてもらうけ。それに、うちのお父さんが、時々お酒をよばれるけ』

『そうせんでもよかぞ。俺達もこうたくさんドンコ釣つたけ』

隆吉は、そういいながら、びくのふたを開けて、のぞきこんだ。ピチピチはねる、にぶいドンコの音がした。

『ジョン家のお父さんは、いくらドンコたべても、飽かんといいやなかね』

清介のいう通りであった。ドンコのかんろ煮でなら、好きな酒が、二本よけいにいけるといふ、長太郎であった。隆吉は、

『そうか。なら、少し急いで、お父さんを喜ばせてやろうな』といつて、急ぎだした。

鐵雄もそこで、又鐵の輪を廻しはじめた。今度は調子がよく、稻荷町に曲つても、とちらなかった。鐵の輪が、ちりんちりんと、輕快な音をたてて、水路の上に擴がつていく。

『あ、ジョンよ。トンカ・ジョン——』

水天宮の拜殿の横から、隆吉を見つけた二人の女の子供が、大聲で呼びながら出て來た。一人は眞教寺のゴンシャンの雪枝で、隆吉と同じ級であった。今一人はやはり同じ年であつたが、御家中生れで、かかりつけの大城病院によく遊びに來る時子であつた。

『ドンコ釣りやろ、見せて、見せて』

二人は兩側から隆吉に迫つて、びくをうばひあつた。

時子は少し小柄の、丸顔で笑うとえくぼが出来る。つぶらな眼が魅力的であつた。雪枝は大柄だが、利發な眼には、やや大人びた氣配があつた。

隆吉を取巻く二人の子供に、鐵雄の鐵の輪が、ぶつかりそうになつた。それをよけようとして、鐵の輪が堀岸の斜面をころげ、汲水場の方へ、すべつていった。

『びっくりさせるな、女御共』と鐵雄は、不服をいって、汲水場へ走つて下りた。堀の向こう、石場の柳の下から、

『ジョン、チンカ・ジョン（小さい坊ちゃんの意、鐵雄の通稱）どうした』と呼ぶ聲がした。番頭の喜一であつた。喜一は、更に仰山な顔をして、

『ドンコはつれたかね。ドンコは』と、重ねてたずねた。鐵雄は、

『ドンコなら、そらそこに』

女の子供に取巻かれてゐる、隆吉を指さした。

水天宮横から、宗信町を廻り二丁堀のところまでいくと、喜一は兩手を大げさに使つて、ジョン達をさし

まねいた。

『早う、早う、ドンコは釣れたかね』

『ほら、この通り』

隆吉は、びくのふたを開け、のぞきこみながら、走っていく。鐵雄は鐵の輪を抱えこみ、清介は一匹の大ドンコを、ふりかざして、その後を追っかけた。時子と雪枝もその後にく。

『おう、おう、旦那さんのご機嫌はこれで直ったものだ。さ、そのドンコは、俺が早う持つていってやるけ』
喜一は、とりあえず隆吉のびくを、奪うようにしてとり、兩手に抱いて、走りだした。

『喜たん、これ、これ、もう一匹あるが』

清介は、手にした大ドンコを、目の高さにあげて、ひらひらさせたが、喜一には聞えないもののようであった。清介はあきらめ顔で立止まり、

『ジョン、トンカ・ジョン。このドンコも、ジョンのお父さんに、食うてもらおうな。その代り、又酒倉で遊ばせてもらうぞ』

『うん。よか、よか。早う倉の中に行こう』

隆吉はそういつて、ふり返った。折角みんなで倉の中で遊ぶなら、時子も仲間にいれたかったのである。

隆吉は、時子をさしまねき、

『時ちゃんもおいで』といつて、くるりと前に向きなおし、歩きだした。それはあきらかに、雪枝を疎外したみぶりであった。時子は、

『ああ、うれし！』といつて、からころ下駄の音も高く駆けて來た。

『わたしも一しよに遊んで』

雪枝は、隆吉に誘われないのが、いささか物足りないうすであった。少しふくれた表情である。時子も、無下に斷りかねて、

『トンカ・ジョン。雪枝ちゃんもよかと？』

ひそかに、だめだという、隆吉の返事を期待したひびきがあった。

『さあ』と、一寸間をもたせ、しようことなしに『よかろ。一人だけ割離せんけな』

隆吉を先頭にして、五人の子供達は、油屋の玄關格子戸の外に、立止まった。いつもは無遠慮に、駆けこ

むところだが、土間の向こうから、大聲で罵りわめく、長太郎の聲が聞えて來たからである。

『それでお前は、古間屋の一番番頭が勤まると思うところか。このばかたれめが！』

いかにも恐縮している久助の聲である。

『へえ』

『船がはいらんならはいらんと、ちゃんと前もって分つとらんで、どうするか』

『長崎からの電報には、タンベ着くことに、なっとりましたけ、それに間違ひなからうち、思うとりました』

『いくらお前が思うても、船がはいらんならどうなるか。古間屋はそれじゃけ、世間の信用が落ちて新聞屋に押されるやろが……』

明治維新までは、九州一帯の生乾魚や、海藻類に至るまで、たった一軒の海産物問屋として、遠近に知られていた北原家であった。それが維新後、自由競争が許されるようになって、別に魚市場が出來たのに對して、古間屋の通稱が生れたのである。そこで油屋の屋號（昔、油屋を營んでいたことがあるので、その名が

残った）をもつ造酒業と、古間屋の屋號をもつ海産物問屋との、兼業だったわけである。

『ばかたれ！ 拔作！』

『俺が、この大ドンコを見せてやろうか』

清介は、その大ドンコで長太郎のご機嫌を、とり結ぶつもりとみえた。隆吉が、それをさへぎって、

『お前じゃ利目はなか。そのドンコ俺に貸せ』

がらりと格子戸を開けたのは、隆吉であった。とたんに、土間にひざまずき、上り樞に兩手をついて、かしこまっていた久助が、ふり返った。

『ジョン、ここはいかん。早うあっちに行き召せ』

『でも、お父さんにドンコ持って來たもん』

隆吉は、手の平のドンコを、久助につき出した。ドンコはすでに、その運命を、あきらめきったもののように、動かなかった。

『ドンコ？』 といって、長太郎はうわずった聲で、

坐った姿勢をくずし、少しからだを、浮かしていった。『喜一が今煮よるぞ。まだあったのか。隆吉、早う喜一にやって、さっさと遊びに行け』

隆吉は、その語韻から、父長太郎の感情のたかぶりを察した。そんな時、父の側に永居して、得をしたためしがなかった。隆吉は、敷居のところで、ためらっている子供たちをちらりと見て、目くばせをした。早くその土間を通って、酒倉の方へ行け、といったつもりであった。

鐵雄は、それが少し不服らしかった。ドンコを釣ったのは、兄隆吉よりも、多かつたつもりである。それを長太郎から認められないのが、物たりないのだ。

『喜たんはどこ？』

それが、不満をあらさまに口に出せない、鐵雄の小さい抗議であった。

『くどの所で煮よるやろ』

シゲが答えてくれた。鐵雄はそこで、

『ドンコを俺がうんと釣ったよ』

『うん、うん。だれもそう思うとるけ』と、シゲはおだやかに、とりなした。とたんに長太郎は、

『ばかたれジョン。またよその餓鬼を、連れて来たか』

と、どなりつけた。ねこのクロが、その聲に驚いて、

土間に飛下り、子供達の足許をかくぐり、酒倉の方へ逃げた。それに誘われたかのように隆吉が、

『さあ、あっちだ。走れ、走れ』と、號令をかけた。

隆吉が、酒倉の入口で、重い戸に手をかけていると、ちゅうまえんだ（野菜畠のこと）の方から、おみか婆が駈けて來た。

『わあ、おみか婆が來たぞ』

清介にそういわれると、隆吉は、大あわてに力をこめて、一気に酒倉の戸を開けた。隆吉の姿をみとめると、おみか婆は、いつも薄氣味の悪い愛想笑いをみせるのである。それが隆吉にとっては、ぞっとするような、壓力となつて、のしかかつて來るのだ。からだが小さくふるえることさえある。だから戸が開くと隆吉は、眞先に酒倉の中に飛込んだ。

『早うはいれ、はいらんと閉めてしまふぞ』

隆吉の激しい言葉に、時子、雪枝、鐵雄、清介の順で、次々に酒倉の中に誘い込まれた。

『ジョン、ジョン、なんとかしてくれんの』

おみか婆の、悲しく訴えるような聲を聞きすてると、